

和蘭（オランダ）便り\*<sup>1</sup> 小 嶋 秀 夫 （名古屋大学／オランダ人文学・社会科学高等研究所）

1997年9月6日（土曜日）

家内と私は8月30日（土曜日）に名古屋を発ち、ロンドン経由でアムステルダム郊外のスヒップホル空港に着き、その日の夜にワッセナール（Wassenaar）に辿り着きました。1日（月曜日）から研究所での活動が始まりましたので最初の週の状況をお知らせします。

まず、こちらの研究所NIAS（オランダ人文学・社会科学高等研究所）の受け入れ態勢がたいへんよく、家具・リネン付きアパートの冷蔵庫や戸棚には予告通りに当面の食料品が入っていました。そのうえ思いがけないことに赤ワインが1本置かれ花が飾ってありました。日曜日は店がほぼ完全に閉まっているので、食料品は助かりました。個人の善意に頼るのではなく、研究所のシステムとしてそうなっているのです。パート・タイマーも含めて20名余りのスタッフが役割分担をして、40名ほどの研究者（オランダと外国がほぼ半々）の研究をサポートするという基本的姿勢が窺えます。快適な環境を確保するために、庭師、管理人、料理人（2名）がスタッフに含まれています。アメリカのプリンストンやスタンフォードの高等研究所を念頭に置いて27年ほど前に設立されたものです。もちろんオランダ人だけの間では国語を使いますが、研究所の共通語は英語です。それ以外の現実的方法は考えられず、英語を母国語とする人々が有利になるのは仕方がないことです。

大学から送った荷物は4日までにすべて届きました。名古屋からこちらの研究所のサーヴァー・コンピュータにつないでテストしておいたノートパソコンも2日からはちゃんと動き始め、日本語の電子メール（文書などの添付も可能）もすでに盛んに使っています。

3日にはハーグの日本国大使館とオランダの外務省、そしてワッセナールの市役所と回って、すぐにすべき滞在のための手続きの大部分を済ませました。市役所の書類はかなり複雑なもので、両親の生年月日の記入まで求められるとは予想していませんでした。そして住民向けの丁寧な英語の資料類のファイルを受け取りました。後は警察の外国人部門に出頭して各種書類をチェックされ、写真入りの身分証明書の発行を待つことになります。人口26,000ほどのワッセナールには約3,500名の外国人が居住しているとのことです。

レイデンとハーグの間にあるこの市は南オランダの真珠とも呼ばれるところで、豊かな緑と田園風景に囲まれています。私はそのうちに退屈

- 
- 1 <sup>1</sup>\* これは、筆者がオランダ滞在中（1997/9-1998/7）に日本の同僚・学生等を念頭において随時書き送った書簡体の報告として下記に掲載されたものの原稿である（サイトの責任者は岡田助教授＜当時→後に東大に転出＞。 <http://www.eds.ecip.nagoya-u.ac.jp/people/bokada0/97-1st-stu/C/holland.html>
  - 2 学部の事務職員や学内外（京都大学の歴史学者[後日オランダの会合に出席]）の人も読んでいた。当時の国立大学教官は「国家公務員」で、出張目的に記された範囲を逸脱したことは出来ないのが原則（しても触れない）。

すると思いますが、家内は喜んでいます。研究所は高級住宅が散在する森の中にあり、1階にある私のオフィスの窓の外も林です。個人研究は来週からぼつぼつ始めますが、グループ（6名、発達心理学と歴史学）の活動は一昨日から始め、次回には私が最初の話をしします。関心の共有度が高く、得難い経験が始まるという予感がしています。来週からはオランダ語の講座も正式に始まります。

月～金は12時半から13時半頃が食事で、研究者の他に主だったスタッフも集まります。前週の金曜日に次週の出欠予定を受付に届け出るようになっていきます。食事の準備ができると研究室ごとのブザーが2回鳴ります。研究室には電話はなく（あるのがよいのか・ない方がよいのかこれまで何回も議論されたようです）、ブザー1回は「電話が入ったので廊下の電話を取れ」、ブザー3回は「訪問者などの用件があるので受付まで来て欲しい」という合図です。1か月12,000円強の昼食代（日常のコーヒー・紅茶代等を含む）で、毎日きちんと昼食をとるのは久しぶりです。それはまた異領域の人との交わりの時間でもあり、スタッフとの対話の時間でもあります。この食事をずっとしていると太りそうだとい合っています。

一昨日（4日）から中古自転車で研究所に通い始めました。問題は予想通り日本人の短足さで、選ぶ余地が少ないのです。新品のアクセサリーを付けて13,000円ほどでした。帰るときにもいくらかにはなるでしょう。いちばん近いコースを取ると10分くらいです。馬、牛・子牛、ガンの親子などがいる野原、ゴルフコース、深い森などを通って行きます。歩くと23分ほどかかるコースです。往復すると1万歩にはなるので本当は歩くのがよいのですが、買い物の都合と、長く続く自転車道路を靴を持って歩くのはやや珍しい感じがしないでもないためです。町の中心部を除くと、人々は自動車、自転車、原動機付き自転車のどれかで移動しており、歩いているのは犬の散歩をさせている人々だといってもよいくらいです。

夜には早く眠くなりますが、家内も私も元気にやっています。招かれたこの機会を有意義に使いたいと思っています。

1997年9月29日（月曜日）

一昨日（土曜日）に、片道1時間半ほどかけてバスで行ったハーレムで、コリー・テン・ボーム博物館を訪れました。ドイツ占領下で地下活動により多くのユダヤ人の生命を救った時計店の家族が住んでいた小さな家（間口は1部屋分）の上階が博物館になっています。収容所で老年の父親と病弱の上の姉を亡くし、収容所や他での無理を重ねた兄をも失った女性の立場からの物語です。未婚の末娘で時計修理も手がけていたコリーが地下活動に入ったのは50歳を過ぎてからのことでした。彼女も逮捕されて10か月間収容所に入れられましたが終戦前にドイツで釈放されオランダに戻りました。この家族の行為はキリスト教精神によるものです。説明役の女性（テン・ボーム家の関係者ではないが、家族の経験をわがことのように語りました）の話を一緒に坐って聞いていた10人足

らずのグループの中に、カナダから来たオランダ人女性がいて、感極まって日本から来たわれわれの手を握り私は彼女を抱擁していました。こちらが話に感じ入っていたのが分かったのだと思います。

コリーたちが書いた最初の本(1971)の英語版を求めて読んでいます。実はわれわれ以外のほぼ全員が予備知識をもって訪ねてきたのでした。しかし、私は店と家屋だけでなく聖バフォ教会の内部や町の佇まいを実際に知ってから読むので、その逆の場合とは違う鮮明な印象を受けます。コリーが老年期になって2人のライターとの共著で出した本で、簡略化され効果的に書かれているにしても、ドラマティックな本です。今日では少なくなった(しかし例外的な人を私は知っていますが)厚い信仰の持ち主たちでした。とくに、父親と姉のベッシーが典型です。

私もクリスチャン・ホームに身近に触れていたのですが、一貫した行為を支える信仰の力に感じ入ったのは初めてのことです。そのことをきょう研究所での昼食時にアメリカの歴史家に話したところ、かれはたいへん関心をもちました。小学生の2人の子どもにとって、よい経験になるので訪れてみたいといっていました。本の名前と博物館の場所を記しておきます。

Corrie ten Boom, J. Sherrill, and E. Sherrill *The hiding place*  
Old Tappan. New Jersey: Fleming H. Revell, 1971.

Corrie ten Boomhuis

Barteljorisstraat 19, 2011 RA Haarlem

1997年12月9日(火曜日)

9月にオランダ人文学・社会科学高等研究所(NIAS)に来てから、早くも予定期間の三分の一を経過しました。仕事はまだこれからですが、近況をお知らせします。

[住居環境]

◆住んでいるのは7層のアパートの最上階です。居間は南東に面していて大きな窓がついています。いちばん大きいガラスは3畳分ほどの大きさです。大多数のオランダの家に倣って、私たちも夜カーテンを開けておくようになりました。オランダでなぜそうしているのか、宗教的・社会倫理的説明(隠すようなことはしていないと示すため)や、家具と整頓のよい室内を見せているのだとか聞きますが、本当のところは分かりません。

◆土・日曜日にはとくによく馬の蹄の音を聞きます。乗馬クラブのようなものの大部分でしょうが、庭に馬小屋をもち自家用の馬車を走らせている人もたまに見かけます。10代の女性がポニーに引かせた馬車に乗っているのも羨ましい情景です。グループ・メンバーのユトレヒト大学の心理学者も、自宅の隣に馬を飼っています。もっぱら10代の娘さん用だそうです。安い馬もあり、飼育コストもそれほどかからないとのことでした。

常に完全に別々に分かれているわけではありませんが、車道・自転車道・歩道・馬道の区別があります。薄暗くなってNIASから自転車で帰るときにときどき出会う黒い馬は、後脚に蛍光塗料の反射帯を巻いていま

す。その馬を引いて歩いている人も、腕に同じような帯と点滅する赤いランプをつけています。自転車も前後にランプをつけ、反射板を取り付ける必要があります。NIASでパーティなどがあって帰るときには、車で送ってもらうこともあります。自転車で10分ほどの道の3分の2は水路に沿って走っているのです。日本では少なくなった深い霧の日がかなりあります。

◆アパートは日常の買い物には少し不便な所にあります。重い買い物は私が自転車で運んでいます。車がないので行動範囲は広くありませんが、休日にはバス・鉄道を使って近くの都市に出かけます。鉄道のレイデン駅を0時過ぎに出る最終バスで帰ったこともあります。また、NIASに短期間来ている老年のオランダ女性研究者にかなり遠方のクレラー・ミューラー美術館（ゴッホのコレクションで有名）まで連れてもらいました。

◆家内はNIASの行事に参加する他に、レイデンのインターナショナル・クラブに行ったり、ブリティッシュ英語を学んだり、NIASの研究グループの人を夕食に招いたりしています。そしてオランダ人の紹介で知り合った何人かの日本女性にたいへん親切にしてもらっています。彼女たちは、ヨーロッパの人と結婚したり、企業・大使館勤務の日本人の夫をもつ人々ですが、最初の頃の経験を踏まえて教えたり助けたりしてくださるので、年をとってから来てしかも10か月しか滞在しない家内は大助かりです。NIASの受け入れ態勢とサポートがよいのも有り難いことです。さらに、NIASへ来ている研究者からも委員を出しているソーシャル・コミッティの企画による催し（持ち寄りのハロウィーン・パーティ、ワイン・テイスティングのタベ、シンタクラス〔サンタクロース〕の日などがすでにありました）も開かれます。私たちも名古屋で外国の研究者を受け入れるときにはそれなりの努力をしたつもりですが、システムとして組み立てていないので不十分な点があったと感じています。

ついでながら、12月2日には研究所にも司祭服を着て3人の従者を連れたシンタクラスが白馬に乗って「スペインから」やってきました。かれは研究者とスタッフの家族の子どもたちに個々の特徴に応じた話しかけをして、個別に用意したプレゼントを渡しました。その後でおとなだけが集まってプレゼント交換をしました。事前に籤によってプレゼントする相手が決まっていて、その人の特徴に応じた諷刺を含んだ詩とそれと結びついた品物（10ギルダー＜630円ほどですが、使いでからいうと税込みでも1,000円ほどの感覚です＞まで）を各自が用意します。順に詩を大声で読んでからプレゼントを披露するという趣向です。秘密になっても結局は誰の詩か本人には想像がつく場合も多いようでしたが、私が書いたのは分からなかったと思います。

#### 〔研究環境〕

今回は物的環境と研究者仲間の社会的環境について書きます。

◆コンピュータ ①研究室にデスクトップのパソコンがあり、事前に知らせておいたアプリケーション・プログラムはすべてインストールしてありました。英文の論文を書いたり発表資料を作成するほかに、インターネットのウェブにつないで調べること、一部の電子メールなどに使

っています。

②日本語処理のためにIBMのノート・パソコンを担いできました。これも研究室に置いており、研究連絡や院生の指導も含めた電子メール、日本語の文書作成、ウェブの閲覧やプログラムのダウンロード、スケジュール管理、データ分析・作図などに欠かせません。このパソコンをNIASのネットワークにつないでもらってからは、持参のプリンターはほとんど使わなくなりました。

最初の1か月ほどは、ウェブで日本の新聞社等によるニュースを読むことはせず、それでとくに差し支えは感ぜませんでした。しかしその後読み始めると今度はやめにくくなり、結局週5日間は朝に来て速報と朝刊の要約を読み、夕方帰る前（日本時間で夜半）に速報を読むのに半時間はかけています。

◆図書館 NIASは参考図書と少数の雑誌類中心の小さい図書室しかもっていないため、レイデンとハーグの図書館に定期的にシャトル・サーヴィスを走らせ、また国内の他の図書館から郵便で書籍・雑誌論文を取り寄せています。そのための検索は端末からオンライン・カタログ(GGC)で行い、用紙に記入して図書係員（司書を含めて3名）に渡しておく、早いと翌日（ハーグかレイデンで直接に借り出してくれた場合）に、遅くとも3～4日後には現物が届きます。これは効率の良いサーヴィスで、人文学・社会科学中心の研究者たちは一様に喜んで利用しています。誰がどのような本を取り寄せているかが分かることにはなりますが、研究テーマを知っている仲間同士のこととしてむしろプラスの意味で受け止められています。私も昔に飛ばし読みした古典を読み直したり、グループの歴史家に教えてもらったり自分で見つけ出した本を読むために大いに活用しています。

しかし、日本語文献の入手に関しては圧倒的に不利です。辞典をCD-ROMでもってきましてし直接に分析する資料は送りましたが、探索領域を広げようとする問題に直面します。近くにレイデン大学はあっても、私の必要性からいうとハーヴァード大学やミシガン大学とは違います。

〔NIASの社会的雰囲気〕

◆研究者はいつでも自由に研究所を使えます。制限事項は、「研究室をベッドルームとして使用しない」、「喫煙は各自の研究室内で、窓を開いてする」、「きちんと監督しないでペットや子どもを施設内に入れない」くらいのものでした。したがって、単身で来ている研究者でNIAS内の施設に滞在する人はよく夜更かしするようですし、夜の2時を過ぎてから自転車に乗っているところを警官に止められ、NIASの研究者だといってもなかなか信用してもらえなかったという話も聞きました。私はそのような無理はせず、夏時間が終わってからは9時（日本時間で17時）過ぎに出てきて5時半頃までいます。ある研究グループ（ティティアンのDiatessaronという福音書研究）は協力分業体制を取って夜遅くまで仕事をし、別のグループ（アルメニア及びシリア語の翻訳技法）のリーダー格が仕事中毒の人であるのに対して、われわれの歴史的発達心理学のグループは共同作業に関してはのんびりしています。研究所の概要や今

回の研究者についての個別情報は、<http://www.knaw.nl/nias>で見られます。

◆個人研究で来ている人と研究グループに所属する人を含めた全員が、9月から10月にかけて各自の研究課題・計画について順に話しました（30分で3人ずつ）。それに続いてレクチャー・シリーズが始まり、その企画のための委員会もできています。これらには原則的に全研究者が出席することになっています（5分前に各研究室ブザーが2回鳴ります）。私はレクチャー・シリーズにはまだ名乗り出ていません。フリーに頭の中からしゃべる場合には、英語のネイティヴ・スピーカーと私とで単位時間内に話す英語の語数が3倍近く違うのではないかと感じるほどです。その代わりに私はなるべく奇問・愚問、そしてできるなら賢問を発するようにしています。レクチャー後にはレセプションがあります。

◆われわれのグループはのんびりしていると書きましたが、次のケース（すべて2月下旬のシンポジウムで発表して、英語の論文を書く）を比較してください。

- ①オランダの歴史家（エルス）がオランダの資料を念入りに使用する。
- ②アメリカの歴史家（マイク）がアメリカの資料を中心に扱う。
- ③オランダの発達心理学者（ヴィレム、ミッシャ、ヘリット）が、欧米の資料を使う。
- ④日本の発達心理学者（ヒデオ）が、欧米の研究に目配りをしながら日本の資料を中心に扱う。

検索した本が日本等から飛んで来るわけではなくレイデン大学の日本語文献は行ってカードを繰らなければ分からないいうのに、たんなるコミュニケーション能力を超えた言語の問題があるので、私がシンポジウムや本をめざした研究グループ活動で意味のある寄与をするにはそれなりの工夫が要ります。

歴史家と発達研究者の共同作業に関してはすでにアメリカで組織的な企てがあり、なかなかうまく行くものではないと私は事前に考えていましたが、今回は小規模な企てながらうまく動き始めたようです。全体として、私の提起した枠組み・視点は支持されています。2人の歴史家は私の考え・視点・知見に関心を持ってくれました。エルスは17～18世紀のオランダの子ども・女性・家族・社会に関する資料をよく教えてくれます。自分が取り寄せた図書のうちで、私が関心をもちそうなものをもってきてくれます。また、マイクは私との相互作用を楽しみだとし、私が1991年に提起したEPIという概念とKai T. Erikson（E. H. エリクソンの息子）の概念（1976年）との類似性を指摘してくれました。これまで欧米の研究者からそういわれたことがなかったので、その本を取り寄せた私は、ウーンと唸りながら読みました。

もちろん発達研究者同士の相互作用からも得ることは多く、また資料ももらっています。そこから副次的に気がついた1つは、オランダの乳児と比べて日本の乳児の生後3ヶ月間の身体発育のペース（身長・体重などの増加量）が急だということです。日本の小児科医には知られたことかも知れませんが、昔からそうだったのかを一応確かめたくなりまし

た。

短期的な成果についてはまだ何ともいえませんが、私にとってここでの経験が大きな意味をもつことは確かで、そのような機会が与えられたことに感謝しながら、しかし時には少ししんどいなと思いながら、毎日を過ごしている次第です。

1997年12月24日（水曜日）

〔半冬眠〕 ここ4か月の天候はとくに恵まれたもののようで、晴天の日も多く穏やかでした。先週の火曜・水曜には零下5～7度ほどに下がり、雨後の低温のために道路が滑ってハーグだけで百何十件かの交通事故があったとのこと。私もオランダの人に注意せよといわれて慎重に自転車（幸いに太いタイヤです）を走らせました。内部と外部の温度差の大きさについて行けずに家内が暫く調子を狂わせました。わがアパートやNIASだけでなくあちこちでスチームが一時故障しました。

しかしその後また暖くなり、氷も溶けてしまいました。それでも今週から2週間、研究所は半冬眠状態に入りスタッフの数は大分減っています。他方、研究者の方は例年になく多くが出てきていて、昨日の昼食には半数近くの顔を見ました。しかしきょうは3分の1ほどになりました。週日にはNIAS内に泊まっていた遠方からのオランダの研究者も家族と過ごすために帰り、ヨーロッパからの研究者も多くは帰国し始めました。私も今日を最後にする積もりで、朝は真っ暗な8時過ぎに出かけ、仕上げた論文をドイツに送りました。「24日まで」ということがよく伝わっているのか、きのう・きょうは日本の大学院生等からのメールが多数届き、その返事を出しました。私が5時半に研究所を出るときにまだ頑張っていたのは、イスラエル、アルメニア、それに一部のオランダの研究者たちでした。来週はごく少数の研究者が来るだけになるでしょう。

〔美術館・博物館〕 私たちは、寒くなる前にと今月上旬に3日間ブラッセルズに行ったので、この休み中は、これからは空いてくるはずの国内の美術館・博物館等に行くだけにします。これらの多くは、1年間有効のミュージアム・カードで入れます。しかもカード自体がわれわれはシニア扱いで安く入手できました。これまでも、そしてこれからもこのカードを活用するつもりです。

〔コンサート〕 これというのはチケットが入手困難なことが多いのですが、これまでにアムステルダム・ロイヤル・コンセルトヘボウ・オーケストラのマーラー、内田光子のモーツァルトなど、そしてヘンデルのメサイヤに行きました。名古屋に住んでいるものにとって内田光子の国内でのコンサートにはなかなか行けませんが、イギリス在住の彼女はちよくちよくアムステルダムで演奏会をするそうです。ところで、メサイアではハレルヤで観客は立たず、そこで拍手があって休憩に入りました。チェンバロの前に大きなリュートを斜めに抱えてギターのように右手でかき鳴らす男性が1人いました（大型の琵琶を爪弾く感じ）。コンサートの難点はアムステルダムやハーグからの帰宅が深夜になることです。ときに、ある日レイデンから乗ったタクシーの運転手は、レイデン大学

で法律を学ぶ学生でした。

〔シニア・カード〕 鉄道は99ギルダー払うと運賃が割引となる（ラッシュ時間中を除く）カードが入手できますが、60歳を超えている私は更に優待措置が受けられます。国際列車が3割引になり、2か月に1回国内の2等車が1日乗り放題となります。シニアに対して只にするのではなくて割引特典をつけて利用を奨励しようという考えでしょうか。カード類はパスポートサイズの写真付きが普通ですが少し斜めの写真でもよく、そのように撮る人がかなりいるようです。

〔日蘭と関係する研究〕 研究所では歴史的発達心理学のテーマでやっていますが、せっかくオランダに滞在するのだから、将来的には日蘭関係の研究テーマも扱いたいと最初から考えていました。研究所に事前に出した研究計画の中には、レイデンの国立民族学博物館所蔵の川原慶賀（かわはら・けいが：19世紀前半に出島でオランダ人のための仕事をした絵師）による日本人の一生のシリーズ絵のことは書いておいたのですが、1か月足らず前から別のテーマが浮かび上がってきました。

◆日本の文献を読み直しているうちに眼に止まったものです。それは、徳川幕府が設けた翻訳セクターで1811年から三十数年間にわたって選択的に日本語に翻訳されたのに、1937年まで出版されなかったオランダ版の日用百科事典の第2版・第2刷（1778年刊行。その基になったのは17世紀以来のフランスのショメールの事典）のことです。子育て・子ども・若者・母親・主婦・父親などに関する項目は、医学的な事項は別にしておいてほとんど翻訳されませんでした。これらが国の将来にとって重要だと日本人が気づいて専ら女性向きに翻訳育児書を出し始めたのは1870年代だという、私も含めたこれまでの考えに合う結果なのですが、もう少し調べる積もりです。

日本の翻訳（厚生新編，1937/1978年）に関しては名古屋大学教育学部の図書掛長の島岡さんが鶴舞図書館に行ってくださり、教室から索引や解説のコピーが送られて来ました。一昨日（22日）にレイデン大学の中央図書館で3時間ほど原本1778年の7巻を眺めて来ました。仲間の女性歴史家（エルス）が興味をもってアムステルダムで原本を見始めているので、オランダ版の一部の内容を知ろうとすれば彼女に依存することになりますが、少なくとも自分の眼で見ておきたかったのです。出産・育児に関する項目の他に、7～14歳、14～20歳の子育ての記述があったり、よき主婦の義務16項目が挙げられています。

◆一方、川原慶賀の人間の一生についての絵は、私の滞在期間中ずっと博物館の改装で閉鎖されることが、こちらへ来てから分かり困りました。しかし、担当責任者に話をしたところ特別の計らいでそのコレクションは移動させずに1月末に見せてもらえることになりました。電話での話では、今まで知られていなかった第4のシリーズが見つかったそうです。その調査結果は、何年か前にオランダ滞在中だった同僚の村上 隆さんに訪問してもらったのが契機となった可能性があります。フローニンゲンとレイデン間はオランダ国内ではそれなりに離れた場所なので、フローニンゲン大学滞在中の村上さんとかれの友人のレイデン大学の心理学

者に動いてもらえたことに感謝しています。

◆私は自分の研究情報収集のために、外国の研究者や専門外の日本の心理学者を動かすという悪い癖があり、自覚しているだけでも前科6犯以上です。ただし、5回は具体的収穫がありました。12月22日にレイデン大学の人類学者・ファン・ブレーメンさんと日本語で話していて、川原慶賀のこの絵にはかれも関心をもっていることが分かりました。この件に関しては博物館を含めて3者で協力し合えるかも知れません。また、来年の3月にはレイデンで貝原益軒のシンポジウムがあることを企画者のボートさん（思想史）が教えてくれました（この人とは関西弁で対話）。前回の便りで、レイデン大学の日本関係の図書がハーヴァードやミシガンと較べて見劣りがすると書きました。それは事実ですが、レイデン大学の何人かが私の仕事に関心をもち親切なことは特記しておく必要があります。

〔仕事に参加する青少年〕 オランダに来てから、私もそうですが家内がとくに感心しているのは、若い人々が日本よりよく仕事に参加していることです。落ち葉やごみの処理、郵便配達にも若い人が従事しています。オープン・マーケットやショッピング街の家族経営の店で10歳くらいからの男女の子どもが手伝っている姿も見かけます。私が孫のための三次元パズルを買いに行ったときも、年齢に応じた適切なものを出したり、私がするのならこんなものもあるよと別のを勧めたのも少年でした。きょうも外側の窓ガラス拭きを請け負っている父親を5年生くらいの息子が屋上に上がって手伝い、後で父親とともに挨拶に来たそうです。そして背を伸ばして父親の代わりに英語で挨拶をし、堂々と家内と握手して帰ったそうです。勉強し遊んでいるだけでよい大多数の日本の子どもとは違います。

個人商店が健在であればモデル・監督としての親の身近で働くことを覚え、家の仕事に参加することが容易くなります。事実、わが家の電気器具の修理や更新に来るのも親子のようです。煙突掃除もいまだに職業として成り立っており、ペアーで仕事しています。中等教育の達成度に関しては近隣諸国に較べて劣るというデータもあるオランダのようですし、学生が働く必要が高くて学業の時間が不足しがちだとも聞きます。しかしオランダは青少年の参加度の点で優れているという印象をもちました。もっとも、私以上に青少年の社会参加の必要性を唱えているミッシェは、子ども議会・学校運営・施設設計など意思決定への参加を重視し、家族経営の店への子どもの参加や大学生の労働についてあまり評価していないので、もっと詳しく検討する必要があるのは事実です。なお、ミッシェ・デ・ヴィンターの本の1冊は英訳が出ているので関心のある人は私に連絡してください。

〔社会の将来〕 一般的に言って、京都で育って石門心学（高校で習ってませんか？）の生活倫理を内面化している私にとって、カルヴィニズムの影響がうかがえるオランダの暮らしは身近なものに思えます。今まで安く便利であればよいという消費者の理屈で私は行動してきましたが、個人商店・小企業・諸職業の機能も多面的・総合的に考える必要を感じ

ました。

しかし一方では、オランダでも統一的な国民国家の土台の緩みが起こっているようです。欧州統一の動きも無関係ではありませんが、国内の社会的・政治的システムの変化が底にあると社会学者から聞きました。もっともかれは私にいわせるとヘブライのエレミヤを思わせる悲観論者で、別の見解もあるでしょう。

1998年1月12日（月曜日）

〔年末・年始〕 年末の27日にアムステルダムのアンネ・フランクの家と国立博物館に行きました。アンネの家は日頃は待ち時間が長くしかも混雑するので、年末ならよかろうと聞いて行っただけですが、天気が穏やかだったこともあってかけっこう混んでいました。家内は長年の念願が叶ったので感銘したようですが、私は9月に行ったコリー・テン・ボームの方に深く印象づけられました。30日にハーグ(Den Haag)に出かけたところ、こんどは美術館だけではなく、レストランが午後2時を過ぎても満員で、4つ目のところで席に着いたのは3時近くでした。人出は日本の歳末風景を思わせるほどでした。休暇シーズンで外国からの観光客も混じっていたのですが、こちらの人の話では、近年オランダ人も年末によく外出するようになったとのことでした。

30日から響き始めていた爆竹の音が大晦日にやかましくなり、真夜中過ぎから花火が盛んに上がるのをアパート（最上階）から眺めました。私たちにとって最初で最後になるであろうオランダの年越しでした。日本のような花火師によるのではなく、一般の人が思い思いに上げるのですが、数の多いのは壮観で、一時は煙と煙硝の匂いが強く漂いました。後で聞いたのですが、オランダでは直前の2日ほどに限って花火の販売が認められているとのことでした。しかしベルギーではそのような制約はなく、国境のあたりで入手する方法もあるようです。これも後から聞いた話ですが、およそ1,200人ほどが花火に絡む怪我をしたそうです。また、北のフローニンゲンでは、30日の夜に若者が騒いだのを警察が適切に処理できずに、一時暴動状態に陥ったとのことでした。気楽に見ていた年末風景にも、いろいろな裏の姿があることが分かりました。

冬至を過ぎた今は8時頃に空が白みます。これまでの4か月は天候に恵まれ、零下5度や7度になったのは2日間だけでした。今は氷もありますが、これからが冬本番でしょう。この機会を活かすために残り半年間にできるだけ研究を進める積もりです。「今後も活動が続ける見込みのある研究者」というのがNIAS（オランダ人文学・社会科学高等研究所）の選考基準の一つでしたから。

1998年3月2日（月曜日）

私の滞在期間も残り4か月ほどになりました。まだまだすべき仕事を多く抱えています。ここ1月ほどのことを少し書きます。

天候は依然穏やかで、本格的な冬なしに終わる可能性も出てきました。防寒靴も買ったし、本格的な冬景色を見ずに終わるのは残念でもありま

す。しかし季節は進み、NIAS構内でもクロッカスから始まって何種類もの花が咲き始めています。通勤路のそばの広大な花畑では、水仙が少し開き始めました。きょうの日の出は7時26分、日の入りは6時22分なので、6時半に帰っても明るさは十分です。夕方の青い空、夜の紺碧の空、朝に一時見られる紅の空などに魅せられています。

〔日本人の一生の絵〕 前（昨年12月24日）に書いたように、川原慶賀（かわはら・けいが）の人間の一生についての絵は、レイデンの国立民族学博物館のフォーラー博士の特別の計らいで、1月27日に見せてもらいました。シーボルトのコレクションに関しては、もともと絵が貼ってあったアルバムにかすかに残っている絵の具による像にまで戻って見せてもらい、6時間も相手してくれたかれの好意には感謝の言葉もないほどです。前に書いた「今まで知られていなかった第4のシリーズ」というのは、シリーズとしては存在していませんでした。話し合いながら見たのですが、作者についての通説の再検討も含めて宿題がいっぱい出てきました。また、コレクターとしてのシーボルトや日本の一部の研究者についての意見など、フォーラーさんの個人的評価も聞きました。

〔青少年に関する研究会議〕 NIASでの研究グループの会議「児童の世紀の終わりなのか？」が終わりました（2月19～22日）。われわれ6名にアメリカを中心とした外からの研究者も加わっての会合でした。青年期研究のJ・ケット、若者の社会史で知られているJ・ギリス（『若者の社会史』という邦訳が出ています。今回はヴィクトリア期以来の子どもの仮想化を扱いました）、中世からルネサンス期の子どもの社会史のB・ハナヴァルト、アメリカの育児・子ども関係のモノ・道具・衣服の研究者のK・カルヴァートを初めとする歴史家や、心理学者では84歳のU・ブロンフェンブレンナーが元気な姿を見せました。予め送付しておいた論文を読んで集まり、1論文あたり1時間の割合で議論しました。私は日本の子どもと若者の歴史を心理学の視点から発表しましたが、多くの歴史家と同時に接触する経験はとても有意義でした。これから各自が原稿を書き直して2000年までに本（英語）にする予定です。今回の会議はNIASによる経費負担（結局はオランダの文部省からの経費）にオランダの芸術・科学アカデミーとアメリカの大使館の援助によるものでした。本当は日本からも1人は歴史家が参加してその経費くらいは日本から出ればよかったのですが、時間的問題もあって実現させられませんでした。1人で1つの文化を代表しなければならなかった私は、たいへんに疲れました。

会議中、家内は以前からの友人であるブロンフェンブレンナー夫人をハーグとレイデンに案内しました。24日にはかれらとわれわれでアムステルダム時間を過ごし、7月初めのベルンの学会での再会を約して別れました。

〔学位審査・授与の儀式〕 2月26日には、アムステルダム自由大学の心理学の博士学位の審査に参加しました。日本流にいうと指導教授の3名（発達心理学、医学＜疫学者＞、臨床心理学）がプロポーネントとし

ていますが、外国からの2名を含めた4名のオポネントが批判を加え、それに博士候補者（女性）が答えるのです。それは4年かけた研究で、公刊予定論文の中には指導教授たちを含めた共著論文もありましたが、すべて彼女が第1著者でした。当日の過程は公開されていて候補者の家族・親戚・友人を含めて100人以上が来ていました。最初に候補者がスライドを使用して論文の要旨を10分で説明してから（これをやらない大学もあるようです）、オポネントとのやりとりに入りました。この会自体は儀式的な性格が強く、候補者だけでなく付き添いの2人の女性も燕尾服のようなものを着ており、私も借り物のガウン・帽子を着用して臨みました。

予め読んでいった論文は英文で印刷されており、私とのやりとりは英語（割り当てられた時間は12分半）でしたが、それ以外はオランダ語でした。国語を尊重するという趣旨も関係しているとのことでした。オポネントは最初に「学長の権威と、私の権利に基づいて」と発言するようにいわれました。それは、私がオポネントになることが学長によって認められており、また学位保持者としての私自身の権利にも基づいていることを意味するものでした。やりとりの終了後、別室で一応協議してよかろうということになると、われわれは再び会場に行進して入り、壇上で主任指導教授から学位記が渡されます。その後で、かれは用意した原稿によって学位取得者を詳しく紹介をしました。それはユーモアを交えた暖かいもののようで、参会者の笑いを誘っていました。

かんたんなレセプションがあり、多くの人が学位取得者にお祝いのことばをかけていました。その晩に、学位取得者に家内ともども夕食に招待されました。オポネントまで招くのはあまりないとのことでした。ここでも残り2人の指導教授が原稿を用意していてユーモアを含んだスピーチをし、プレゼントを渡しました。夫からはネックレスが贈られました。私もプレゼントを用意していたよかったと思いました。ディナーの後には若い人々中心の深夜のパーティが予定されていましたが、それは辞退して帰りました。それでも市電・鉄道・バスを乗り継いでアパートに辿り着いたのは、11時半を過ぎていました。

〔ソーシャル・コミッティ〕 NIASに設置されたこの委員会の活動は盛んで、2月だけでも3つの行事がありました。1日にはアムステルダム在住で地元の歴史に詳しい2人のフェロウによるアムステルダム・ツアー、12日にはベルギー・ビールのタベ、25日には2人のフェロウの大骨折りによるインド・ディナーがありました。いずれも資料を用いた説明がつくところが研究所の特徴です。できるならわれわれも日本酒と日本料理のタベをしたいのですが、家内の細腕と私の技能では50もの人に日本食らしきものを提供することができないので、初めから諦めています。

〔中欧・東欧の研究者向けプログラム〕 NIASは中央及び東ヨーロッパの研究者向けの2か月のプログラムも担当していて、今日から16名の研究者が正式に活動を開始しました。ハンガリー、ポーランド、ブルガリア、ロシア、ルーマニア、ウクライナ、ベラルーシ、アルメニア、チェコからの人文学・社会科学の男女の研究者で、すべて博士学位の所持者

です。この人たちはそれぞれが研究テーマをもっているほかに、一連のレクチャーが予定されており、われわれも興味のあるものに参加します。きょうは、欧州連合に出ているオランダ大使がかれの30年にわたる活動をもとに講演をしました。

このプログラムにも現れているように、ヨーロッパの中で必要とされている役割を果たすために、お金を出すだけでなく実際の活動をするという構えがオランダにも明確に認められます。日本のある県が研究所の設置企画を練っていて、その代表や企画会社などの人々が昨年NIASを訪ねてきたことがありました。こちらの所長にいわれて私も少し会いました。意義ある企画だと思うけれども、アジアの人を集めて研修してもらおうと考えるのではなく、世界の研究者が行って研究したいと思うような魅力的なシステムの構成が勝負ではないか、図書などの資料を国内だけではなく外国からも電子媒体などですぐに取り寄せられるようにできないかなどと思いつくことをいって置きました。

研究所でのコミュニケーションをどうするのかも重要です。NIASでも英語しか実質的な解決方法がないのです。ホストとなる日本にとってはしんどい課題です。世界の主要な言語相互間の即時自動翻訳が可能な携帯装置が相当先になってできるにしても、それを通して日常的な研究上・生活上のコミュニケーションがスムーズに進むでしょうか。ドラえもんに頼めば、それぞれが母国語でしゃべっていても、聞き手には自動的にそれが自分の母国語として聞こえる機械を出してくれるでしょうけれども。自然科学でもそうでしょうが、コミュニケーションの方法は人文学・社会科学の研究においてとくに大きな問題だと思います。当面は英語の運用力を日本人がつけるしかないように思います。私のような年齢（61歳）になってからはなかなか難しく、日本の若い人々が読み書きも含めた英語のコミュニケーション能力を高めるように意識して努力することを期待したいと思います。

1998年4月25日（土曜日）

私の滞在期間も残り2か月ほどになりました。かんたんに最近のことを書きます。

まず、これまでの滞在中で1回だけの積雪が4月13日にありました。日本にも知られているキューケンホフという庭園がすでに開園（8週間ほどだけ）していて、チューリップなどがどうなるのかと思いましたが、16日に行ったときにはちゃんと咲いていました。旅行者として訪ねる場合にはかんたんではないかも知れませんが、こちらの人によると、キューケンホフは朝1番に入るか午後遅くなってから入るのが、混雑を避ける賢いやり方だそうです。

その前の4月5日には、ナールデンという町の教会にバッハのマタイ受難曲を聴きに行きました。日本ではなかなか全曲が演奏されないようです。半年も前にNIASでまとめて申し込んだのにオーケストラも歌手も見えない席でした。しかし音はよく聞こえました。ナールデンは、教育学の領域で著名なチェコのコメニウスゆかりの地ですが、季節と曜日の

関係でその博物館は見られませんでした。これら2つは、NIASのソーシャル・コミッティ企画の行事でした（ただし、入園料・チケットなどは利用者負担です）。

〔シンポジウム・講演など〕 3月末にレイデン大学で貝原益軒に関するシンポジウムがあったので、3日間にわたって聞きに行きました。ヨーロッパの研究者に加えて、日本からも医学史・思想史・近世史などの専門家が（大部分は日本語で）研究発表を行いました。日本でこれらの人々が一堂に会することはまずはなかろうと思われる貴重な機会でした。参考になることがいくつもあったのは収穫で、日本の研究者の何人かとも知り合いになれました。それにしても、個人の寄付を基にした豊富な資金があるのは羨ましいことです。

4月23日には、レイデン大学の人類学の授業（通過儀礼がテーマ）で話しました（題目：人間の生涯と死後の世界についての日本の概念、及び産業化以前と以後の日本における人生段階）。最初は「日本研究の大学院生は日本で過ごした経験があるので、日本語でやってもらって大丈夫だ。」という話でした。実はこれまで外国で日本語で講演する機会が一度もなかったので、「それは結構なことです。」と言っていたのですが、後の段階で「広く聴いてもらうために英語でしてほしい。」ということになりました。ドイツからわざわざ2人の女性研究者が来た他に、20年ほど前にNIASのフェロウだったイスラエルの研究者でレイデン大学に来ていた人も聴いてくれ、多様な質問が出ました。

〔中欧・東欧の研究者向けプログラム〕 前回に感心して書いたこのプログラム（5年目だそうです）が間もなく終わります。研究者に直接聞くと、いろいろ意見がありました。多くの人々に共通しているのは、宣伝臭の強い講演・見学に対する評判が悪いことです。欧州連合やオランダ経済の奇跡の講演、あるいはNATO本部見学などのプロパガンダは結構だということです。前回に、日本もアジアの研究者を集めて研修してもらおうなどと考えない方がよいと書きましたが、ますますその感を強めました。

〔博物館の職員などの対応〕 人生段階図の現物を見たり写真入手するために、レイデンの国立民族学博物館（3回）とロッテルダムのアトラス・ファン・ストルクのコレクションに行きましたが、たいへん親切に対応してもらいました。それにはいくつかの条件が関係していると思います。一つは私がNIASのフェロウであることです。それに両方とも、最初にNIASのオランダの研究者に紹介の労を取ってもらいました。さらに、私が入手したい情報を特定化して先方に無用な手数をかけさせないようにしたこと、そして私の関心事と必要性を先方の担当主任がすぐに理解できるように伝えたことです。相手と気が合うということも無視できません。アトラス・ファン・ストルクの場合はコレクションの写真が注文できるシステムができています。それは決して安くないので、オランダの研究者も私も最低限しか依頼しませんが、こちらにとっても都合がよく、先方にとっても収入源となるのでしょう。翻って日本の場合を考えると、こちらの研究者がフラストレートされた話も聞きます。一般化

は難しいのですが、図書館はまずまずだとしても、美術館・博物館では内外の研究者の必要に対応する利用システムが整っていないのかなと思います。

1998年6月5日（金曜日）

私の正味の滞在期間は残り3週間ほどになりました。先月20日には、われわれの研究グループをアパートに招いて家内が夕食を出しました。珍しいチューリップの花束の他に、1550年から1700年までのオランダの日常生活を描いた風俗印刷物（木版、銅版、エッチング）を集めた立派な本（1997年刊行）をもらいました。ちゃんと全員の名前による添え書きが付いていました。フォーマルな場合には代表によるスピーチがあるところです。最後の1週間はいろいろ行事や処理すべき雑件もあって落ち着いてまとめを書くゆとりがないので、思いついたことを少し書いて最後のオランダ便りとします。

季節はすっかり変わりました。当地のきょうの日の出は夏時間（1時間時計を進める）の5時20分過ぎ・日没は22時頃です。この分だと夏至の頃には、23時を過ぎても空に明るみが残っていそうです。

それとも関係して、実はこちらにいる期間の大部分、私は寝付きの問題を抱えてきました。年齢の問題に高緯度地区の日照への慣れの問題が絡んでいると思います。しかし、睡眠問題を抱えているのは私だけでなく、NIASのフェロウのうち少なくとも10名（私も入っています）は問題を訴えているというのがあるフェロウの情報です。かれによると、原因として考えられそうなのはいくつかあります。フェロウに選ばれて実績を上げなければというストレス、NIAS構内の宿泊施設では人間が出す生活騒音（週2回開かれるバーも含めて）、オランダ・ベルギーのフェロウの多くは週末だけに自宅に帰るという単身赴任に絡む問題、そして一部の若手研究者（4名はいるようです）は間もなく切れる雇用契約の後の職探しの課題です。私が直接尋ねた年輩のフェロウは、「本国の大学から迫害するようなことをいつてくる。」と冗談めかしていいました。ただし、睡眠問題を抱えているオランダ人はかなり高率だという調査結果を見たこともあるので、NIAS特有の問題ではない可能性があります。ところで私の場合、第1のストレスもとくに自覚せず、他の条件も当てはまらないので、最初に書いた2つの要因の複合のせいになっている（原因帰属）のです。

〔講演など〕 5月初めにコンスタンツ大学に招かれ、4日には講演をしました（題目：子育て理論の組み立てに参与する4つの役割：過去と現在）。先月のレイデン大学での講演もそうですが、完成した仕事だけでなく現在展開している考えを交えて話しました。英語の原稿を準備し、NIASのスタッフ（ネイティヴ・ライター）に校閲してもらっています。講演後に出た質問は論文の展開に役立ちます。

ところで、一般的にいうとオランダ人は他の多くの欧米人と比較して、日常生活での交渉にしても、学問上の討論での批判にしても、ストレートに表現します。フリースランド地方出の人はとりわけそうだという話

の真偽は分かりません。しかしわれわれの研究グループにはフリージアンが2人おり、厳しい批判が交わされることは事実です。それとともに、冗談をうまくいう人も多く、私などは瞬時的に真に受けてしまうこともあります。冗談をいう雰囲気には入れますが、すぐに冗談で返すのはなかなかできません。

〔誤解の訂正〕 生半可なことは書いてはいけないと思ったことが1つあります。12月24日に、美術館・博物館や鉄道のカード類につけるのは斜めの写真「でもよい」と書きましたが、「正式のパスポート写真に関する限り、そうでなければならない」ことが分かりました。あのときには、NIASのオランダ人の何人かに聞いたところ諸説があり、まとめてあのように書いたのです。しかしどうも気になって専門の写真家に問い合わせてもらいました。その回答によると、片方の耳（以前は左耳に限定されていた）を含めて顔の3／4が見えなければならない（真正面からだとも1／2）という条件があり、必然的に少し斜めの角度になるとのことです。ついでながら、以前は白黒に限られていたのが今はカラーでもよいことと、厳格な宗教上の理由がない限り頭に被り物をつけてはならないという条件があるとのこと（日本では、有無を言わず、はねるでしょうか？）。これも、正式に官庁に問い合わせ確認したわけではありませんが、前の情報が不完全だった点を訂正します。

〔最後に〕 まだ、こちらでしたことの総括ができる段階ではありません。帰国前にNIASに出す報告書には、それを織り込む必要がありますが。

1974年に名古屋大学に移ってからこれまでの24年間に、4回外国に住むことができたのは幸いでした。1976年からハーヴァード大学（12か月）、85年のニュージャージー医科歯科大学ラトガーズ医学部（2か月）、93年のミシガン大学（5か月）、それに今回の10か月です。ミシガンの場合は客員教授で大学院の授業担当がありましたが、他はすべて研究目的でした。またラトガーズが文部省の在外研究員（短期）であった以外は、すべて外国の資金によるものでした。いずれにしても、渡航を認め、不在期間中に私の役割の肩代わりのサポートをしてくださった学部、とくに教室のスタッフ、さらには不便を忍んだ大学院生・学生諸君に感謝しています。

これまでの外国生活のうちで2番目に長く、また短期間の訪問は別にして初めてのヨーロッパ生活でした。これという大成果がすぐに出るわけではありませんが、私の研究生活にとってたいへん貴重な期間であったことは事実です。歴史家が隣の研究室にいて、時には私と一緒に動いてくれるということは、これが最初で最後のことになるかも知れません。また、ずっと教育学部が職場であった私にとって、人文学の研究者間の議論の雰囲気に触れたのもよい経験でした。さらに、単身で行くとはほとんど観光をしない私が、今回は国内を中心に多くの場所を訪ねたのも、疲れたにしても悪くはなかったと思います。「日本で10か月間こもりっきりになって1冊の本を書く」、「NIASのようなところで研究グループに属せずに10か月で英語の本をほぼまとめる」、それに、「今回のような過ごし方をする」という選択肢がもし事前にあったとしたら、やは

り今回の過ごし方を選んだのだろうと今も考えています。

残りの期間に着手し仕上げるべき論文・文書が最低2件、仕上げるべき論文が3件、読むべき本が最低3冊などと、まだまだ仕事が残っています。それ以外のことは諦めることにしました。6月26日のNIASのさよならパーティを終えたあと、29日にスイスのベルンに移動します。その日の朝まで使用したリネン類と洗濯済みのリネンをすべてまとめて袋に入れておくと、専門の業者の手できちんとクリーニングし、それを次の研究者が気持ちよく使えるという仕組みです。費用は預けてある1,000ギルダー（7万円近く）から差し引くのです。合理的なNIASのシステムの一例です。

ベルンでは、国際行動発達学会の役員会の一部に出るほか、今回のグループによるシンポジウム発表と日本での共同研究のポスター発表をします。7月8日にズーリック（チューリッヒ）を発つと9日昼には名古屋です。いろいろのもの・ことが待ちかまえていることでしょう。終わり)